

北部ケニア干ばつレジリエンス通信

The Project for Enhancing Community Resilience Against Drought In Northern Kenya (JICA ECoRAD Project)

北部ケニア干ばつレジリエンス向上のための総合開発及び緊急支援計画策定プロジェクト
2014年9月特別号(1/5)：自然資源管理・家畜バリューチェーン（マルサビット）編



2012年2月に開始された本プロジェクトでは、マルサビット県において、「持続可能な自然資源管理」、「家畜バリューチェーンの改善」、「生計多様化」、「平和構築」の各プログラムを実施中です。本号では、プログラム4の発行に合わせ、各プログラム事業の主なトピックについてご紹介致します。

持続可能な自然資源管理

自然資源管理プログラムでは、牧畜民の干ばつレジリエンス向上に資するため、下記の水源施設の建設・改修事業を実施しました。

施設	場所、コミュニティ	進捗
Rock Catchment	Ngumit	完成
Pipeline System	Arapal	完成
Water Pan	Hury Hills, Turbi, Dirib Gombo, Gar Qarsa, Halo Girisa	完成
Solar Power Pumping System	Korr, Kubi Qallo, Shurr	完成

Water Pan の利用 今年の大雨季(3-5月)は雨量が全体的に少なく、本プロジェクトで建設したwater panにも影響があったのですが、その中でも特に下記の施設では十分な湛水がみられ、限られた水源の一つとして、周辺のみならず、遠方の牧畜民にも大いに利用されました。

施設	利用状況
Yaa Gara water pan in Huri Hill	<p>(i) 大雨季(14年3-5月)による湛水&水利用: 湛水状況 周辺では、本Panが唯一水を湛えた水源であった。(このため、通年以上に家畜の集中が見られた) 家畜 約702,000頭日(牛約1,400、ヤギヒツジ約8,700、ラダ約1,600、計約11,700頭、2ヶ月間利用) 人 252,000人日(420世帯、約2,000人が4ヶ月間利用)</p>
Dololo Dokatu water pan in Dirib Gombo	<p>(i) 少雨期(13年10-12月)による湛水&水利用: 湛水状況 貯水量の約85%近くの湛水が見られた。 家畜 約764,400頭日(牛約500、ヤギヒツジ約12,200、ラダ約40、計約12,740頭、2ヶ月間利用) 人 利用なし</p> <p>(ii) 大雨季(14年4-7月)による湛水&水利用: 湛水状況 降雨量が少なかったが、前雨期の水が残っていたため、十分な湛水が見られた。 家畜 約955,500頭日(牛約500頭、ヤギヒツジ約8,600、ラダ約80、計約9,180頭、3.5ヶ月間利用) 人 利用なし</p>

プロジェクトの啓蒙活動や働きかけにより、water pan 周りの放牧地とpanの水の計画的な利用の重要性を牧畜民が理解し始めて来ています。その現れとしてコミュニティは、乾期中にwater pan 周りの牧草地を利用する為に、雨期には同エリアでの放牧はしないルールを自主的に定めて、牧草管理を行う様になってきました。伝統的な牧草管理習慣の復活です。

写真
Dololo Dokatu Pan →
に集まった家畜群



↓ Shurr リーラステム周辺に集まったラクダ群
(右側に見える白い屋根がソーラーパネル)



新しい家畜マーケットの設立&既存マーケットの活性化

牧畜民にとって牧畜は主産業です。その家畜に関するマーケットバリューチェーンを改善し、牧畜民による家畜売買を活性化させることによって、彼らの家畜の流動性・自由度を高める事が出来ます。そして牧畜民が家畜マーケットを有効に利用し、干ばつに備えることによって、干ばつの被害を一部緩和することが出来るようになります。本プロジェクトで行なった各種活動で、各家畜マーケットは順調に取り扱い量を伸ばしており、周辺地域の牧畜民の家畜売買活動に大きく寄与しております。これら3家畜マーケットの小家畜(ヤギ/羊)の販売実績を下表に示し、Diribマーケットの立ち上げから現在までの小家畜頭数の月毎の動きを下の図に示します。

場所	持込まれた頭数	取引された頭数
Dirib Gombo 家畜マーケット (Jan'13 - Aug'14)	7,137	4,710
Jirime 家畜マーケット (Jun'13 - Aug'14)	8,105	6,268
Korr 家畜マーケット (Jan'13 - Aug'14)	25,973	18,089

なお、新規で構築したDiribマーケット、および改修し使い始めたJirimeマーケットの2つにおいては、本プロジェクト実施前の取引実績はゼロでしたので、本事業による大きな効果と言えます。

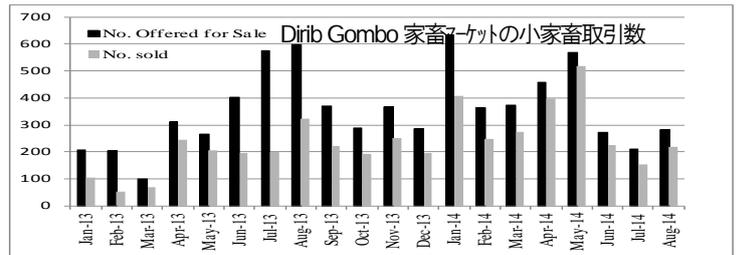
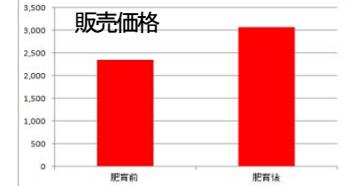
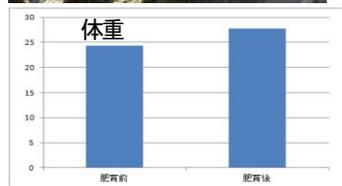


写真:
Jirime 家畜マーケット →
マーケットに集まった家畜群



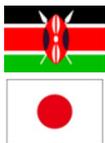
肥育状況@Feedlot 本プロジェクトでは豊富な泉を有するKalacha村を対象に、重力灌漑による牧草栽培とそれを用いた家畜の肥育による付加価値増を目指したFeedlot事業を実施しております。第1回目の肥育(ヤギ20頭)が成功裏に終わり、現在第2回目の肥育(ヤギ20頭)が行われております。



図：個体体重: 24.3kg→27.7kg

図：販売価格: Ksh2,414→Ksh3,070

6週間肥育した後の第1回目の肥育の結果、体重は3.4kg増(14%増)、販売値段も、ksh.656増(31%増)となり、肥育効果と増収益が観察されました。また、同グループは自主的に乾期の干し草販売も開始し、収入増を目指して、自分たちで考えながら活動の幅を広げてきています。



北部ケニア干ばつレジリエンス通信

The Project for Enhancing Community Resilience Against Drought In Northern Kenya (JICA ECoRAD Project)

北部ケニア干ばつレジリエンス向上のための総合開発及び緊急支援計画策定プロジェクト
2014年9月特別号(2/5)：生計多様化特別（マルサビット）編



マルサビットカウンティにて実施中の生計多様化プログラムですが、本プログラムを開始してからおよそ1年半が経過し、プログラムはいよいよ終盤を迎えています。本号でも、先号と同じく現在までの進捗、概略評価と今後の予定をご報告します。

マルサビットカウンティにて実施中の生計多様化プログラム

既にご報告の通り、JICA's ECoRAD Approachとして家畜利用型（ヤギ事業、養鶏）、地域資源利用型（塩、レイシシ・蜂蜜事業）の2類型を意識し、昨年2月から下表の通り、合計6地区において合計27グループに対し4種類のパイロット事業を行っています。

パイロット事業対象地区	生計多様化事業内容	対象グループ数	プロジェクトからの主な投入
北部：Kalacha	塩事業	1	起業家/VICOBA トレーニングとメンタリング活動
北部：Kalacha	ヤギ事業	4	ヤギ、技術/VICOBA トレーニングとメンタリング活動
中央部：Dakbaricha/Jirime	養鶏事業	8	鶏と鶏舎（代表者のみ）、技術/VICOBA トレーニングとメンタリング活動
中央部：Gar Qarsa	ヤギ事業	9	ヤギ、技術/VICOBA トレーニングとメンタリング活動
南部：Arapal	ヤギ事業	2	ヤギ、技術/VICOBA トレーニングとメンタリング活動
南部：Ngurnit	レイシシ・蜂蜜事業	3*	起業家/VICOBA トレーニングとメンタリング活動

*：個人で参加した5人が追って1グループを形成し合計3グループ

パイロット事業の主な進捗

ヤギ事業

8月時点で、子ヤギは32頭（雄ヤギ18頭、雌ヤギ14頭）となり、昨年8月時点の21頭（うち雌ヤギ11頭、雄ヤギ10頭）から増加、初期導入ヤギを保有しているメンバー以外、現時点で8名に雌の子ヤギが配布されました（2月の5名から3名の増）。当初予定では更に多くの子ヤギが生まれている予定でしたが、導入した改良種の環境要因等から来る流産が多く、システムの進捗に予定以上の時間がかかってしまった結果となりました。他方、リーダーがしっかりしている幾つかの女性グループでは（アラパル等）、適宜実施したメンタリング活動によってグループとしての連帯が強まった例もあり、ヤギ事業そのものとは別の意味で間接的効果が見られたことは、収穫でした。



2番目に子ヤギをうけたメンバー（左）と、チェアレディー（右）（Arapal）

養鶏事業

当初導入した鶏の増殖の状況は、現在生存雛数が60羽、うち13羽が計9名のメンバーに配布され、2月段階での雛95羽（25羽10人配布）と比べると減少となっています。産卵数はむしろ多少増加したのですが、今回は残念ながら雛の生存率が低い結果となりました。

プロジェクト側として、これまで産卵と孵化技術の指導に力を注いでその部分については改善されましたが、その後のステップである雛の成鳥までのケアについては、マルサビット近郊の冷涼な気候を考慮した飼育の必要性に係るコミュニティ住民に対するガイダンスが不足していたと考えています。

一方で、あるグループでは、鶏の提供を受けた代表者が、改良鶏の扱いを完全に習得し、生産規模を拡大、養鶏事業を本格的に行っていきたいとのビジネスプランを立てていることが報告されました。このように、グループ間ないし個人間で差があるものの、改良鶏の便益を理解したメンバーは、積極的に利益を最大化するよう



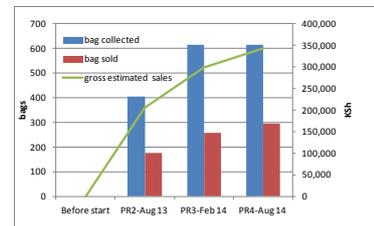
メンバーが工夫して作成した鶏用鶏舎（Jirime）

努力している様子が観察されています。

塩事業

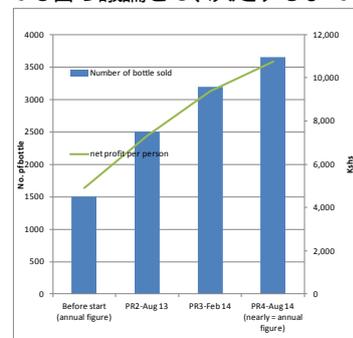
昨年開始した塩ビジネスの最初のサイクルでは、これまでに、296袋を販売（先回の258袋から38増加）、総売上（予想）はおおよそ35万シリングになりました。

この間、現乾期から開始される2回目のビジネスサイクルの準備をすべく、追加のビジネス研修などを実施し、これまでの開拓したマーケットでの販売実績を踏まえ、2回目の収集目標をたてるなど、ビジネスの一通りの側面について学びを行っており、現在自らがたてた目標に向かい、塩の回収に向けて準備しています。これまで回収した利益は、2回目のビジネスに必要なコストを除きメンバーでシェアすることにするなど、グループ内個人メンバーへの便益シェアの形についても自ら議論をし、決定するまでに育ってきました。



レイシシ・蜂蜜事業

支援前にソーダの空き容器を回収・洗浄し販売に使っていた蜂蜜事業について、当初導入支援を行ったプラスチック容器は、先回の報告（9割程度の販売）の後、ほぼ完売となっています。この一年の新容器による販売で、ソーダ容器時代と比べ年間およそ倍の収入になったと見積もられます。



主としてこの大雨期から、新たに今年の蜂蜜事業が開始され、メンバーたちは蜂の巣を購入し始めています。今回から、蜂蜜販売に使うプラスチック容器は自らが購入する方針としており、個々人でも能力が高いメンバーは既に各自で容器を調達、販売を開始している例もあります。その他のメンバーは、グループの代表者を決めて容器を一括購入することとしており、その為の資金積み立てを開始しています。



レイシシと蜂蜜を販売しているグループメンバー（Ngurnit）

概略評価と今後の予定

2つの家畜利用型事業では、ヤギの生物学的な理由、また改良鶏の養鶏増殖技術の習得に時間がかかったこと、つまり双方とも技術面で全体な進捗が当初の予定通りに進まなかったと言えます。他方グループの貯蓄は遅々としつつも進み、多少なりとも干ばつの際に利用可能となったグループも現れました。また個人によっては、プロジェクトで導入した技術を習得し格段に飛躍した例も観察されています。

地域資源利用型事業では、各ビジネスサイクルにおいて改善した点が多くみられ、収入増が確認できました。原則として彼らの現状の能力、また環境にあわせた範囲での事業内容としたことから、今後プロジェクト終了後の住民による持続性についても比較的高いと言え、生計の多様化に繋がるのが期待されます。

今後、モニタリングは適宜継続・縮小しつつ、対象グループに対し本プログラムの終了を伝えてまいります。また将来同種の支援への参考としてもらうべく、本プログラムにおける各種事業実施の教訓を引き出し取り纏める予定です。プロジェクトとしては、上記事業は我々の支援が入っている間だけ実施されるのではなく、支援終了後も住民たちによって継続され、将来の干ばつレジリエンス向上の為の生計多様化に少しでも貢献してもらえればと、切に願っています。



北部ケニア干ばつレジリエンス通信

The Project for Enhancing Community Resilience Against Drought In Northern Kenya (JICA ECoRAD Project)

北部ケニア干ばつレジリエンス向上のための総合開発及び緊急支援計画策定プロジェクト

2014年9月特別号(3/5)：牧畜民コミュニティにかかる人類学的考察編



本プロジェクトでは、北部ケニアの牧畜民社会をより深く理解することを目的として、マルサビット県での研究経験が豊富な人類学者を1ヶ月間現地に派遣し、マルサビット県における牧畜民社会の構造とプロジェクトとの関わりについての調査を行いました。以下、その調査結果の要約を記します。

**** 「マルサビットにおける人類学的調査 要約」 ****

対象地域の社会構造と意思決定システム： 一概に「マルサビット県の牧畜民」といっても、それぞれ異なる特徴を持つので注意が必要である。マルサビット県には、主にボラナ、ガブラ、レンディーレの3部族が多く分布しているが、ボラナとレンディーレは、同じ牧畜を主業とする民ながら、その様相は大きく異なっている。特に、意思決定に焦点を当てて眺めると次のようになる。**ボラナ**は、主にマルサビット山麓部の高地に定住し、住居と耕作地をもち半農半牧の生活をしている（この地域の農業はほとんど天水農耕で、主としてトウモロコシと豆類を栽培）。

意思決定について： ボラナの伝統的な意思決定機構は、拡大家族の家長となる長老たちが集まる長老会議である。長老会議は定期的に開くのではなく、議題（家族間の揉め事、農地をめぐる問題、放牧地や水場の利用問題、開発援助、行政関係など）がある度に、その議題の当事者が会議を呼びかける。ただし、長老たちのほとんどは教育を受けたことがないので、開発にかかわる新しい議題については、教育を受けた若者たち（ユースグループ、女性グループ、CDC など）にも会議に参加させて、一緒に議論する。とくに開発にかかわる新しい活動は決議の後、若者たちを中心に実行する。



木の下で行われる長老会議(ボラナ)

組織的な放牧先の選択： 放牧に関しては、乾季が深まるにつれ、放牧地の移動がはじまるが、その意思決定は牧夫だけではなく、高地に住む人びともかわる点がレンディーレと大きく異なる。まず、周辺地域に牧草が減少、もしくは水場がなくなりそうになると、牧夫は、家畜主にその旨を報告する。報告を受けた家畜主は自分の地域内での移動が可能である場合は、自分で移動先を決めて牧夫に指示を与える。もし、他地域へ移動する必要が有る場合（干ばつ時など）は、行政官である local chief や州議員に報告を行う。local chief や州議員は、家畜主からの報告が多数上がってくると、長老会議を招集する。長老会議では、現在の放牧地の状況を確認したり、各地に人を送って新たな放牧地の情報を収集する。情報が収集できた時点で長老は再び会議を開き、どの地域へ家畜を移動させるか決定を下す。この決定に従って、行政官や長老は放牧先を訪問し、先方の行政官や長老から放牧の許可を得る。この様に、牧夫のみでなく、決定事項に行政官の関与があることが特徴的である。

しば、教育を受けた者が長老らを説き伏せる場合もある。個人ベースでの放牧先の選択：家畜の移動についてはボラナと異なり、牧夫の意向が強く反映される。ラクダ放牧キャンプは基本的に集落単位でつくられ、同じ集落出身の青年牧夫が責任者として複数いる。牧夫達の話し合いで移動の時期と経路が決まる。キャンプの移動は、牧草や水場といった自然資源の利用だけでなく、治安状況や儀礼活動なども関係する。一方、小家畜の放牧キャンプでは世帯単位で放牧群を形成しているため、管理者の判断で移動が決まる。

CMDRR アプローチの適用について： 本事業ではCMDRR アプローチを用いて住民主体で案件を実施している。その活動母体として「干ばつ委員会」を結成し、これが、住民と政府/ドナーとの繋ぎ役や各種実施委員会(水組合や家畜マーケット組合)のまとめ役、各委員会の会計監視役の役割等を担うと期待されている。しかし、過去他ドナーが実施した事業においては、多くの地域で、干ばつ委員会がドナーの資金供与停止と共に活動を停止しており、持続的に活動をしているとは言い難い状況である。その特徴を下記に示す。

① 支援事業で結成された干ばつ管理委員会のメンバーは、概して「街に住み、スワヒリ語を話す、教育レベルの高い人」が選ばれる傾向がある。村落を代表とする長老がメンバーに入れられる事もあるが、大抵の場合それは形式的なものである事が多く、活動は主に「街に住む人達」が中心となって行う事が多い。実際の活動内容も、委員会のメンバーが直接裨益する形の活動を行なっている場合が多い。



住民集会で発言をする女性(ボラナ)

② これまでの北部ケニアにおける長い援助活動の積み重ねの結果として、CMDRR 業務を請け負う NGO が形式的表面的な活動しか行わなくなってしまった事、干ばつ委員会メンバーが活動を通して個人の利益を追求する傾向が強くある事、参加住民が過度に外部からの支援に頼る傾向が強くなって来た事、など、本来の望ましい状況とは異なった環境に現在あるということが事業実施者は理解しなければならない。

③ 干ばつ委員会は、概して「長老の目」としての役割を担っていると言われることが多い。この言葉が示すように、彼らは、地域社会からの強い権限が与えられている訳ではなく、社会的ステータスは低い。その上、概して無償で活動を行うことが多いため、この責務に対するインセンティブが低く、それが活動の持続性に大きな障害となっている。

「コミュニティのお金」という概念： 北部ケニアで実施される干ばつ事業では、委員会が利用費を住民から徴収したり、その資金を次の運営資金とするケースが多い。しかしこのシステムが、牧畜民社会にスムーズに受け入れられていないケースが散見され、事業持続性を損ねる原因となっている。まず第一に、北部ケニアには、「コミュニティの土地/放牧地」という概念はあるが、「コミュニティのお金」という概念は存在しない。牧畜民社会でも、皆から集金をする習慣があるが、それは具体的な用途が明確である場合に限り、「将来に備えて資金をプールしておく」という事は彼らの文化習慣からは離れた行為であると言える。よって、牧畜民がその概念を十分理解していない可能性が高く、特に意思決定のプロセスを明確に理解していないケースがある。これによって、皆の同意を得ずに委員会幹部が資金を利用してしまふなどの問題が起きるケースが散見される。*****



コミュニティのお金を保管する金庫箱：鍵が3個着いており、別々の者が持つ(レンディーレ)

今後の活動に向けて - 正しくコミュニティと向き合う為- 上述の要約に示す通り、プロジェクトがコミュニティに対する活動を行う際には、その集団の結びつきがどのような形であり、そして誰が意思決定を行い、その役割/責任範囲がどういったものであるかを正しく理解することが重要となります。特に支援事業の実施という切り口からみると、批判を恐れずに大胆な類型化をすすれば、①上述のボラナ社会で見られた行政官の果たす役割の多い「行政官/長老一体型」と、②レンディーレで見られたより個人的要素および伝統的な長老の発言力の強い「個人/長老主導」型、の2タイプに分けられるのではないかと考えております。しかしこれは、各コミュニティがどちらかのタイプに明確に帰属するのではなく、各コミュニティの成長過程や部族風習・歴史などによってその状況は様々であり、この2タイプを両極端とする幅の間の何処かに位置する、と考えるのが妥当ではないでしょうか。事業実施の際には、受け入れる側の社会背景/構造が違うのですから、全く同じ事業を実施するとしても、やはりその状況に合わせて異なる方法を取るのが理想的です。そのアプローチ方法を今後探っていきたくと考えております。

「行政官」の役割と伝統的なコミュニティとの関係 近年北部ケニアでは、伝統的な長老以外にも、従来の行政の長である Location Chief や、2013年からは地方分権によって選出されるようになった州議員等も地域住民に対し強い影響力をもっている。彼らは国や州の条例などを村人に伝えるだけでなく、村人の要望を集約して行政に働きかけることが期待されている。一般的には Location Chief は地域の秩序維持を担当し、一方、州議員は、地域の開発に関わる役割をもつと一々言われている。しかし実際には、地域住民はこれらの行政官の権力の正当性や役割分担について正確に理解しておらず、実際行政官が行う活動についても責任区分が曖昧である。たとえば、あるボラナ族の地区では、村人の離婚賠償をめぐる長老たちが話し合っ解決しようとしたところ、Chief が警官を連れて来て当事者を逮捕するケースがあった。比較的新しい「行政官」という役割と地域住民の関係は、その行政官のパーソナリティ、長老会議がもつ影響力、そして地域住民の行政に対する理解と依存度によって異なり、今後も、変容する社会構造に影響を受けながら、随時変化していくものと見られる。

レンディーレ は、幹線道路沿いの町や村周辺に定住集落をつくる一方で、放牧キャンプを中心に高い移動性を維持した遊牧活動を行なっている。レンディーレの集落は出自原理を反映して、サ/クワや複数のリネージが集まって作られる。意思決定について： 現在、レンディーレの中心地である Korr 村には、行政官として、chief が1名、assistant chief が2名、州議員が1名いる。しかしボラナ社会と比べると、行政や政治的な影響力が低い。レンディーレ社会における意思決定プロセスには、出自による結束と年齢階級による社会的な地位がよく反映されており、集落内の出来事は、基本的に長老たちの話し合いによって解決する。一方、集落間の話し合いや地区全体にかかわる話し合いでは、集落・クラン単位での結束がつよい。集会のなかで、同じ年齢階級の長老の支持を呼びかけたり、上位長老が下位長老に対して強い口調で議論したりする場面がよく見られる。しかしながら絶対的な権威は存在しないため、基本的にあらゆる出来事は話し合いによって決められる。開発に係る新しい議題についてはボラナと同様、教育を受けた若者たちも活動の中核的立場となっており、しば



北部ケニア干ばつレジリエンス通信

The Project for Enhancing Community Resilience Against Drought In Northern Kenya
(JICA ECoRAD Project)

北部ケニア干ばつレジリエンス向上のための総合開発及び緊急支援計画策定プロジェクト

2014年9月特別号(4/5)：自然資源管理・家畜バリューチェーン（トゥルカナ）編



トゥルカナ県での本プロジェクトの活動は、2013年4月より開始しました。マルゲット県と同じく、「持続可能な自然資源管理」、「家畜バリューチェーンの改善」、「生計多様化」の各パイロットプログラムを実施中です。本号では、プロジェクト4の発行に合わせ、各パイロット事業の主なトピックについてご紹介致します。

対象の11パイロットコミュニティ

本プロジェクトでは、水資源分布、牧草資源分布、道路アクセス、治安状況、各Sub-countyへのバラスなどの要素を考慮し、下記のパイロットコミュニティを選定しました。

Sub-county		Sub-locations:	Location
North	1	MILIMATATU	YAPAKUNO
	2	KANGAKIPUR	KAERIS
West	3	LORITIT	LETEA
	4	LOKICOGGIO	LOKICHOGGIO
Loima	5	LOKIRIAMA	LOKIRIAMA
	6	LORENGIPPI	LORENGKIPPI
Central	7	ELIYE	KANGATOTHA
	8	KERIO	KERIO
South	9	LOCHWAN-GAMATAK	LOCHWAN-GAMATAK
	10	LOKICHAR	LOKICHAR
East	11	LOPII	KOCHODIN

持続可能な自然資源管理

自然資源管理プログラムでは、牧畜民の干ばつレジリエンス向上に資するため、下記の水源施設の建設・改修事業を予定しています。

Water Pan 名	コミュニティ	種類
Kabilkeret Water Pan	Milimatatu Sub-location	Improvement
Nakisira Water Pan	Mogila Sub-location (Lokichoggio Location)	Improvement
Edukon Water Pan	Nanam Sub-location (Nanam Location)	Improvement
Kaalale Water Pan	Lorengippi Sub-location	New construction
Nachuro Water Pan	Nachuro Sub-location	New construction
Kasuguru Water Pan	Milimatatu Sub-location	Improvement
Boreholes	20 sites	New construction

井戸建設/運営 井戸掘削は27本中20本の成功井戸(成功率74%)を得ました。特に、牧草資源が豊富なトゥルカナ北郡/西郡/ロイマ郡での成功井戸率は高く、92%(12/13本)となっております。この中には、以前他ドナーによって掘削され失敗に終わったところ戸が3箇所も含まれており、新たな水源を得た村民の喜びはひとしおです。



ハンドポンプ井戸は、利用中に故障したりや定期的なメンテナンスが必要となります。その為、プロジェクトでは、利用者に呼びかけて、某NGOが実施している「修理保険」への加入をお願いしています。現在までに11コミュニティが2年間の登録料7,000シルを自分達で集め、保険登録を行っております。これにより、今後2年間の井戸の故障やメンテナンスに係る費用が、全て保険でカバーされることとなります。これで、持続的な井戸の利用が可能となりました。

Water Pan 建設 '14年6月に開始されたwater panの建設工事は、現在進行中です。最乾季の8月に想定外の降雨に見舞われ、進捗が鈍化しましたが、次期雨期前までの完成を目指しております。



↑写真) 左:Nachuro panの工事風景ブルドーザによる掘削を実施中。右:Nakisira panでは掘削工事完了直後に雨が降って雨水が湛水し、工事中にも関わらず、多数の家畜の訪問を受けております。

家畜バリューチェーン

家畜バリューチェーン事業では、家畜の販売活動を通して、牧畜民の干ばつレジリエンス向上に資する活動を行っています。

	活動	場所
1	Kerio 家畜市場改善事業	Kerio
2	家畜市場連携および活性化事業	Lodwar, Lokichar, Kakuma, Kerio
3	Reseeding 事業	Lokichoggio, Loritit

Kerio 家畜市場改良工事 Kerio村では、家畜市場の改良事業を行なっております。同市場では、週1度のマーケット日には、周辺地域から商人が集まり市が立ちます。家畜を売る牧畜民の他、様々な買い物客で村は賑わいます。



↑写真) 左:来訪者で賑わうKerio家畜市場の小売店通り。右:建設中の家畜市場施設。完成後は、遠距離トラックへの荷積みが可能となる。

Reseeding 事業 は、集落近くの土地を有刺植物の枝で囲み、そこに家畜が入らないようにして、内部草地の牧草を天水で育てる活動です。ここで栽培される牧草は、主に、乾季にも集落にとどまるミルク用家畜や子供家畜や、その他弱った家畜のために使われ、生育向上や肥育に資するものと期待されます。この活動は、コミュニティが外部資金に頼ること無く行えるため、トゥルカナ県内でも自主的に実施しているコミュニティが幾つか見られます。本プロジェクトでも、コミュニティの主体性を尊重し、自主的に望むコミュニティに対してのみ、活動を行うこととしています。



↑写真) Reseeding Farm 作成トレーニング風景左:Land preparation。右:集水畝の作成および、種の播種作業。



北部ケニア干ばつレジリエンス通信

The Project for Enhancing Community Resilience Against Drought In Northern Kenya
(JICA ECoRAD Project)

北部ケニア干ばつレジリエンス向上のための総合開発及び緊急支援計画策定プロジェクト
2014年9月特別号(5/5)：生計多様化(トゥルカナ)編



トルカナカウンティにて実施中の生計多様化プログラムですが、マルサビットと比べて開始時期が遅いこともあり、プログラム開始後10カ月程度の経過でプログラムは終盤を迎えることとなります。本号にて、現在までの進捗、概略評価と今後の予定をご報告します。

トルカナカウンティにて実施中の生計多様化プログラム

既にご報告の通り、JICA's ECoRAD Approachとして家畜利用型(IGA<家畜販売>、干し肉事業)、地域資源利用型(小規模天水農業、漁業事業)、必要財サービス提供型(IGA<小売店>事業)の3類型を念頭に、昨年末から下表の通り、合計5地区において合計11グループに対し4種類のパイロット事業を行っています。

パイロット事業対象地区	生計多様化事業内容	対象グループ数	プロジェクトからの主な投入
西: LORITIT	IGA事業 (家畜販売と小売店)	1	起業家トレーニングとメンタリング活動
	小規模天水農業事業	1	農業技術トレーニング、実験プロット、メンタリング活動
Loima: LOKIRIAMA	IGA事業 (家畜販売と小売店)	2	起業家トレーニングとメンタリング活動
	干し肉事業	1	干し肉技術トレーニング
中央: ELIYE	漁業事業	2	漁業技術/起業家トレーニングとメンタリング活動
南: LOCHWANGAWATAK	IGA事業 (家畜販売と小売店)	2	起業家トレーニングとメンタリング活動
東: LOPIL	IGA事業 (小売店)	2	起業家トレーニングとメンタリング活動

パイロット事業の主な進捗

IGA事業

選ばれたグループは、IGA (Income Generating Activities: 収入向上活動、ここでは小規模ビジネスの意)として家畜販売と小売店を挙げました。既に彼らが実施しているIGA活動ですが、プロジェクトによるビジネストレーニングを受け、多くのグループが新しい知識を得、ビジネスからの収入を向上しているとのモニタリング結果が出ています。特に学んだこととして多くのメンバーが言及している点は、①プライベートと混同していたビジネス用の運転資金や商品を別々に扱うこと、②以前は全て家庭用に使用していたビジネスからの利益を、部分的にでも次のビジネスの運転資金にまわすこと、です。これによって家畜販売では取り扱う家畜数を増加させ、また小売店では取り扱い量を増加させた事例が観察されました。



家畜販売の様子 (Loritit)



メンバーが営む小売店の様子 (Lokiriana)

尚、IGAの活動には地域毎の特徴があります。Lopiiは町から離れている場所に位置していることからビジネスの規模も小さいものですが、Lochwarは、Lodwar-Kitale間の幹線道路沿いに位置し、その恩恵を受けビジネスを展開しています。またLokirianaでは、隣国のウガンダにあるMorotoの経済圏に含まれており、Border tradeを有効に活用しビジネスを展開しています。IGAのようなビジネスでは、このような地域特性がまさに効いてくる分野と言えます。また興味深いことに、マーケティングにおける携帯電話の重要性に気がついたと言うメンバーもあり、インフラや通信機器の発展に伴い、それらを上手に取り入れ活動を行っている様子も観察されています。

小規模天水農業事業

トルカナでは、マルサビットと比較すると河川が多いこともあり、限られた場所ではありながら、天水また灌漑による農業が導入・実施

されつつあります。本事業では、比較的雨が多いとされるLorititにおいて、既に粗放的な形で天水農業を実施しているコミュニティに対し、技術トレーニングと実験プロットでの栽培実演により、彼らの継続利用が可能なレベルで新技術の導入を試みました。作物はローカルソルガムを用い、主たる具体的な技術として、条播をPFS (FFS) 手法によりコミュニティに伝えています。本格的なコミュニティ自身による導入は来年の大雨期を待たねばなりません。実験プロットで彼らが実施していた散播との比較において良好な成長がみられており、またメンバーの一人が遅延した降雨を期待して開始した彼女自身のプロットで既に導入を試みるなど、労力減や収量増に向けた新栽培技術の学びがみられています。



条播を自分の圃場に取り入れたメンバー (Loritit)

漁業事業

トルカナ湖で既に行われている漁業につき、漁業技術と魚販売の包括的な改善を期待し、対象コミュニティに対して技術トレーニングとビジネストレーニングを実施し、マーケティング、販売先確保の重要性を学んでいます。全体としてはまだまだ生産量が少なく、積極的な販路開拓には課題が多いものの、グループメンバーのうち幾人かは、漁に出る回数を多くしたり、これまで漁を試みなかった新しい場所で漁をするなどして漁獲量を増加、結果収入増を果たした例がみられています。



漁業グループメンバー (Elye)

干し肉事業

以前より伝統的な形ではありつつ実施されてきた干し肉加工。保存がきく加工方法として、干ばつ時の家畜を材料として主として個人の家畜消費を念頭に、技術改善を行うべくトレーニングを実施しました。以前は伝統的な方法として肉片は太く、また脂肪などを除去していなかったことから乾燥が徹底されず時間がかかり、また早期に腐敗していましたが、今回のトレーニングにより、細長く薄くカットした脂肪を除去することで乾燥が素早く行われ、保存期間も大幅に長期化する技術を対象メンバーは学ぶことができたようです。メンバーは、自家消費にも活用するとともに、これを活用したIGAに取り組みたいとの希望を示しています。



左: 伝統的な干し肉 右: トレーニング後の干し肉
太く乾燥が不十分 細く早期の乾燥が可能

概略評価と今後の予定

トルカナでは、基本的にキャパシティデベロップメントを意識し主として知識の提供から、3類型共にコミュニティ自身による改善を促す手法をとってきました。現時点ではGrantやHandoutは他ドナーと異なり提供していません。Handoutをもらうことを慣れているグループは多いものの、これにより、IGA事業のグループでは、ビジネス知識を活用しビジネスの拡大がみられ、漁業グループの幾人かのメンバーは、漁業活動を活発化させ収入を増加させていることから、彼ら自身の活動にすぐ適用可能かつ必要とされている知識の提供と動機づけ、その後のメンタリング活動でのフォローアップが大事と言えます。

今後、モニタリング活動により浮かび上がった課題に対応すべくパイロット事業での支援活動はもう少し継続しますが、原則的にはマルサビットと同様プロジェクトによる支援活動は適宜縮小しつつ、対象グループに対し本プログラムの終了を伝えていく予定です。加えて、トルカナでの事業実施は短期間ではありましたが、本プログラムにおける各種事業の教訓についても取り纏める予定です。